

ユーラシア地域国家としての中国——P. Perdue, *China Marches West: The Qing Conquest of Central Eurasia* (2005)を素材にして

村田 雄二郎

本報告では、ユーラシア大陸という広域的空間、そして中国史という長期的時間枠の中で、現代中国のマクロな位置づけを模索すべく、P. Perdue 氏の近著『中国の西征』(*China Marches West: The Qing Conquest of Central Eurasia*, Cambridge, Mass.: Belknap Press of Harvard University Press, 2005, 725pp.) を素材に、いくつかの問題提起を試みる。

筆者も含めて、近年の中国史学界では、清朝中国（1644-1912）を現代中国の一つの祖型とみる視点が強まりつつある。領土・境界や民族構成はもとより、地域的市場圏、生態環境、人口移動など、現代中国がたちづくる諸条件の多くが、歴史的に見ると、清朝期に起こった変化と直接結びついているからである。また、19世紀以降台頭し現代にも続く国家主義の面でも、清朝中国との接続面を強調しないわけにいかない。たとえば、歴史地理学者の葛劍雄は、中国史における統一と分裂の時期区分についてこう語っている。すなわち、秦始皇帝による中国統一は、中原を中心とする集権的政権を樹立したものの、その後、モンゴル支配の時期に至るまで、中原政権の版図は拡大したり縮小したりして、中国の領域には中原王朝以外の自治政権が絶えず存在していた。これは厳密な意味での統一とは言えない。中国の真の統一は1759年（乾隆帝のジュンガル平定による中央ユーラシア征服の完成）に実現したのであって、それもアヘン戦争まで、わずか81年しか持続しなかった。したがって、中国の歴史では、分裂・分治の期間が主要なもので、統一はきわめて短期的なものだった、と（1）。見られるように、中国の統一・分裂の基準が乾隆期の中国に設定されており、最大版図を獲得した1759年の時点をもとにした上で、「中国」の空間的広がりが計量されているのである。現代中国はその意味からすれば、1759年に出来上がった「乾隆中国」と地続きの国家であるとも言え、清朝81年間の短い「統一」時代の後継政権とも位置づけうるだろう。

さて、従来の解釈では、清朝を（a）遼・金・元に続く異民族による中原支配と見る征服王朝説、（b）秦漢以降持続する帝国の最後の王朝と位置づける中華帝国モデル、（c）異民族王朝の「中国化」のプロセスを重視する漢化（sinicization）モデルなどが主流であったが、近年はアメリカの「アルタイ学派」と呼ばれる一

連の研究者が、これらの学説やモデルを批判し、多民族複合国家たる清朝の“非・漢 (non-Han)” 的要素を重視する一連の成果を発表しつつある。また、これとは別に、グローバル・ヒストリーを志向する経済史家らは、清朝中国の経済的力量を高く評価しつつ、もう一つの“近代”あるいは“近世 (early modern)” 中国の、ヨーロッパ史とは異なる独自の歴史的個性を抽出する試みを続けている。

こうした最近の研究潮流は、16世紀から18世紀という時代が、全世界的に見ていくつかの大きな特徴を共有する時期であることに注目した内陸アジア史家のジョセフ・フレッチャーの「統合的歴史」に多くの着想を得ているように思われる。フレッチャーは1985年に書かれた遺作のなかで、「単一の“近世”史は存在するか」と問いかけつつ、1500年から1800年の世界の諸地域において、相互に関連した同時的な発展が見られることを指摘し、(a) 人口の増加、(b) 歴史的テンポの加速化、(c) 経済活動の中心としての「地方」都市の成長、(d) 都市商業層の勃興、(e) 宗教の再興と宣教活動、(f) 農村の騒擾、(g) 遊牧民の没落、など大局的なパターンの同一性を見出すことができる、と述べている (2)。今回紹介する本書も、この故フレッチャーの先駆的な問題提起を受けとめつつ、近年のグローバル・ヒストリーや「アルタイ学派」の成果をふまえて、清朝の歴史をユーラシア諸国家の抗争のダイナミズムの中に置いて、その軍事・政治的帝国としての実像を総合的に描き出そうとした労作と言えるだろう。本書については、すでに小沼孝博氏による要を得た紹介 (2) があるので、内容紹介はこれに譲り、三点のみ読後感を交えた私見を述べておきたい。

本書の第一の特徴は、清朝国家を同時代の二帝国 (ジュンガルと帝政ロシア) と並べ、帝国間の抗争、とくに軍事的衝突や領土拡大に多くの紙面を割いていることである。筆者は、康熙帝から乾隆帝まで、清朝の領土拡大と征服戦争の勝利をもたらした背景として、生態的環境や生業形態 (農耕/遊牧)、さらに商人を巻き込んだ資源の動員、国境管理など政治的組織力の向上、宗教や文化的要素などを挙げ、帝国形成のプロセスに多面的に分析を加える。

要するに、ユーラシアにおける辺境/前線という視点は、文化、商業、それに暴力の動員を通じた境界画定と国家建設に着目するのである。領土拡大のためにつくられたこの辺疆の文化は、清帝国の内政、行政機構、正当化の儀礼や世界における自己認識に影響を及ぼすことになった。このことは清の発展の理由だけでなく、またその衰退の原因を説明することができる。(p. 546)

このようにして筆者は、清朝の対ジュンガル戦争の遂行こそが、清朝の国家形成をもたらしたのだとして、内国植民地の拡大に焦点を絞りつつ、ユーラシア東西

に起こった近代的国家形成の同時平行性に着目するのである。

第二の特徴はそれと関連して、清朝の成立から帝国形成のプロセスにおける中央・内陸アジアの重要性を指摘していることである。アルタイ学派の成果を重視する著者は、本書のタイトルにも示されるとおり、清朝（王朝）と中国（国家）の現代的な関連づけにも充分自覚的であるが、「藩部」と「内地」といった単純な二分法ではなく、陸のアジアに顔を向けた清朝国家の複合的性格を余すところなく活写している。そのぶん、日本の研究者などが提起するアジア海域内交易の姿が視界から遠のく傾向にあるが（書中に、「西洋」との互市やカントン・システムの話はほとんど出てこない）、これはあつかう地域と時期によるちがいということもあるだろう。

第三の特徴として指摘すべきは、著者が既存の歴史叙述への見直しを詳細な資料考証を通じてねばり強く進めていることである。現代中国の清朝史像のみならず、ロシアやモンゴルの自国史も、一国史（ナショナル・ヒストリー）や階級闘争史の枠組みに縛られてきたとする著者の、既存の歴史学に対する批判の舌鋒は鋭く厳しい。われわれが依拠する清朝史のオリジナルなテキストも、実は同時代の皇帝・官僚らによる事後の正当化や神話化の結果であることが明かされる下りには、一種謎解きに似た爽快感すら感じるだろう。それ以上に、敗者すなわち滅亡したジュンガル帝国の視点から、清朝の歴史、そして16～18世紀のユーラシアの歴史を書くことは可能なのかという問いかけは、知らず知らずに“Han-centered nationalism”に囚われてきた既存の中国史研究に対して深い反省を迫るものである。そうした問いかけに、nation-stateとしての中国または中華ナショナリズムをどのように理解するかという、きわめて現代的な問題意識が隠されていることは言を俟たない。

ここで、日本という研究の場から本書をながめてみることにしよう。日本は満洲語やモンゴル語を駆使した「アルタイ学派」の先蹤をなす研究蓄積のある場所で、いまでも入関以前の清朝史や八旗制度の実証研究では世界最高峰のレベルにあるとあってよい。ただ、乾隆期以降のいわゆる「衰亡期」になると、清末史・近代史の領域になり、アヘン戦争を画期とする西洋（海洋）の衝撃を重視し、ロシア帝国との関係や「辺疆問題」（そもそも、内モンゴルや東トルキスタンはいつから中国の辺疆になったのか？）は別にして、ユーラシア帝国としての清朝の存在感は薄くなる。せいぜい、魏源<sup>ぎげん</sup>や龔自珍<sup>きょうじちん</sup>ら19世紀前半に活躍した経世派学者の西北開発論や1870年代の外交政策の基軸をなした塞防／海防の論争（ロシアとの戦いに備えた内陸西北の守りを固めるか、日本との戦いに備えた沿海部の守りを

固めるかの論議)が触れられる程度で、乾隆中国との連続性の視野に入れた研究はそれほど多くはない。その理由としては、著者も触れるように、18-19世紀交代期(乾隆・嘉慶年間)、たしかに「西洋」の存在が経済的にも軍事的にもかつてなく重要性をまし、清朝の中央・地方政府がその対応に追われるようになったということが指摘できる。それにつれて、清朝中国はユーラシア帝国としての性格を希薄化させていったということが考えられよう。

もう一つ歴史観に関わる要因としては、日本から見た中国像・中国認識という問題があるように思われる。端的に言えば、Perdue氏の指摘する近世以降の東西並行の国家形成において、日本は世界/アジア/日本という三重のアイデンティティ構造の中で、近代化と富強を目指したのに対して、中国は天下あるいは世界という一つの秩序の中で国家形成を遂げたために、(東)アジアというアイデンティティを必ずしも必要としなかったという、「発展」経路の差があると思う。もちろん中国でも、20世紀初頭に日本モデルの近代化を採用した時期や、1990年代の東アジア共同体構想の高まりの中で、アジア・アイデンティティを自覚し、強化しようとする動きがなかったわけではない。しかし、いまでも「中外」「中西」という二元論で自他の解説格子を構築することが物語るように、清朝中国にせよ現代中国にせよ、日本が「忘れ得ぬ他者」として常に中国を意識していたほどには、日本/アジアを必要としていたわけではなかった。要するに、ここで浮かび上がってくるのは、同じアジア(亜洲)・東アジア(東亜)ということばを使っている、概念やイメージの中身はずいぶん異なっているということであり、中国にとって東アジアという地域概念は、全体的ではなく局部的なアイデンティティをなすにすぎないということである。

言い換えれば、日本から海を隔ててみる中国(沿海を中心とした「内地」中国)は、あくまで中国の顔の一面にすぎないということであり、日本の中国認識の偏りや相互認識の非対称性——それ自体は一部歴史的地理的要因に帰せられるべきものであって、非議するいわれはない(われわれはみな自分に都合のよい他者像しか描けないのかもしれないのだから)——といった問題群である。現代中国の強まる大国意識やナショナリズムに向き合うためにも、そうした地域アイデンティティの「同床異夢」を互いに自覚しておく必要があるだろう。また、近代日本の主流をなす各種アジア論(明治の「興亜」、昭和前期の大東亜共栄圏、戦後の漢字・儒教文化圏など)の展開も、中国からの視点を加えることで、その意義と限界があぶりだされるだろう。

注

(1) 葛劍雄『統一与分裂——中国歴史的揭示 [増補版]』, 中華書局, 2008 年, 77-78 頁。

(2) 小沼孝博「ピーター・C・パーデュー著『中国の西征——清朝の中央ユーラシア征服——』, 『東洋学報』第 88 卷第 3 号, 2006 年 12 月, 40-48 頁。

(3) Joseph Fletcher, “Integrative History: Parallels and Interconnections in the Early Modern Period, 1500-1800” , *Journal of Turkish Studies*, no. 9, 1985. 内容紹介は, 岸本美緒「東アジア・東南アジア伝統社会の形成」(『岩波講座 世界歴史 13』, 岩波書店, 1998 年, 5-6 頁) に拠った。